

学院史資料の紹介

学院宗教主任・経済学部教授 高野 進

富田富士雄 編『関東学院大學生生活』

現代思潮社 1954年（昭和29年）2月15日発行

これは「大學生生活シリーズ」有名22大学の一つとして発行された。富田富士雄編となっているが、先生ご自身の執筆によるものである。富田先生は1934年（昭和9年）に旧制の関東学院神学部を卒業、執筆当時は本学経済学部教授、後に学院長を歴任された。ご専門は社会学、社会政策である。

本書はまことに貴重なもので、今では幻の出版物である。内容を紹介しておこう。

扉の後ろの頁に、横浜市内の略図があり、三春台と金沢八景の両キャンパスがイラストで示されている。次に4頁にわたって、キャンパスの風景写真が掲載されている。続いて二つの校歌が紹介されている。[三春台の学校では、「青海の見ゆる高台」、金沢八景の学校では「青海は波しずかなり」が歌われている。]

本文に入ると、第一篇「建学の精神」では、関東学院大学の歴史、建学の精神、クリスチャン・スクール。第二篇「学生生活」では、文教の地・金沢八景、図書館、大學生生活の中心ゼミナール、宣教師プロフィール、運動部の活動など。第三篇「真理の探究」では、経済学部案内、経済学部の教授たち、工学部案内、工学部の研究室と教授たち、関東学院大学と英語など。第四篇「伸びゆく大学」では、「大学の未来図」。第五篇「大学の周辺」では、収益事業部、大学の弟妹たち〔併設学校のこと〕。第六篇「入学案内」。第七篇「資料」で

は、学校法人関東学院役員、学校法人関東学院の経営している学校、大学の組織、関東学院大学学則、同基督教研究所規則、同短期大学部規則など。

新制大学として発足して五年目に上梓された本書は、戦後の貧しさを映し出しているが、新しいものを生み出そうとする真摯な努力と、自由で明るい希望を感じさせてくれる。

今日の日本、そしてわが学院も「安泰」をむさぼっている。別な視点からは、「プラトーン」状態を脱出できないでいる。方向が見えない今日だからこそ、学院と大学の草創期において目指したものをもう一度学びなおさなければならない。

本文中の「関東学院大学の歴史」結語部分を引用しておこう。

「関東大震災、戦災、火災等、幾度かの試煉は、関東学院の基盤を益々強くしたのである。関東学院大学は、不死鳥のように炎の中から立ち上った。

関東学院大学は、新制大学としては新しい。現在、新興の勢をもって、理想を目指して進んでいる若々しい青年の気力に溢れた大学である。しかし、その背後

には、信仰の自由を求めて新しい天地を開いたプロテスタントの運動に連り、その信仰に基礎を置き、明治から大正、昭和へと発展して来た前記の歴史をもっている。先輩たちは、ここに受けた教育を基盤として各方面に活躍し、また、関東学院大学の建設に、後援している。学長坂田先生、副学長白山先生を初めとして、亀井教授、中居教授等、旧高等商業部以来の教授たちが、今も教壇に立ち、新進の教授、助教授たちと力を合せて、関東学院大学の発展に邁進している。」（二〇、二一頁）



編集後記

『関東学院史資料室ニュース・レター（No. 3）』をお届けいたします。

1999年6月に同『ニュース・レター』が創刊され、No. 2は2000年4月に発行されました。それ以後は、事情により今日まで休刊されていましたが、この度、装いも新たに No. 3として復刊できますことは、大いなる喜びです。

関東学院には、前身から数えると百年を超える歴史と伝統があります。しかし、今までそれらに基づき、学院史資料を継続的に大切にしていたとは、残念ながら、言い難いと思います。

21世紀は、急変する時代の要請に応え、不断の学校改革と特色ある学校づくりが必要です。そのためには、建学の精神に立った視点が不可欠です。学院史資料は、単なる過去の遺物ではなく、新しい時代に学校が発展するための礎としての役割も担っています。

今、自校の歴史と伝統を踏まえ、地に足のついた学校づくりが求められています。その意味でも、学院史資料を積極的に収集してゆきたいと思っています。その成果をこの『ニュース・レター』をとおして紹介して参ります。今後は、年に2回の発行を予定していますので、関係各位のなご一層のご支援ご協力を衷心よりお願い申し上げます。

学院史資料室長 瀬沼達也

人に
なれ
奉仕
せよ

関東学院 校訓

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第3号 発行日 2003年(平成15年)12月8日

発行人 関東学院 学院長 松本昌子

編集 関東学院 学院史資料室

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7049 FAX. 045-786-7862

環境に配慮して

R100

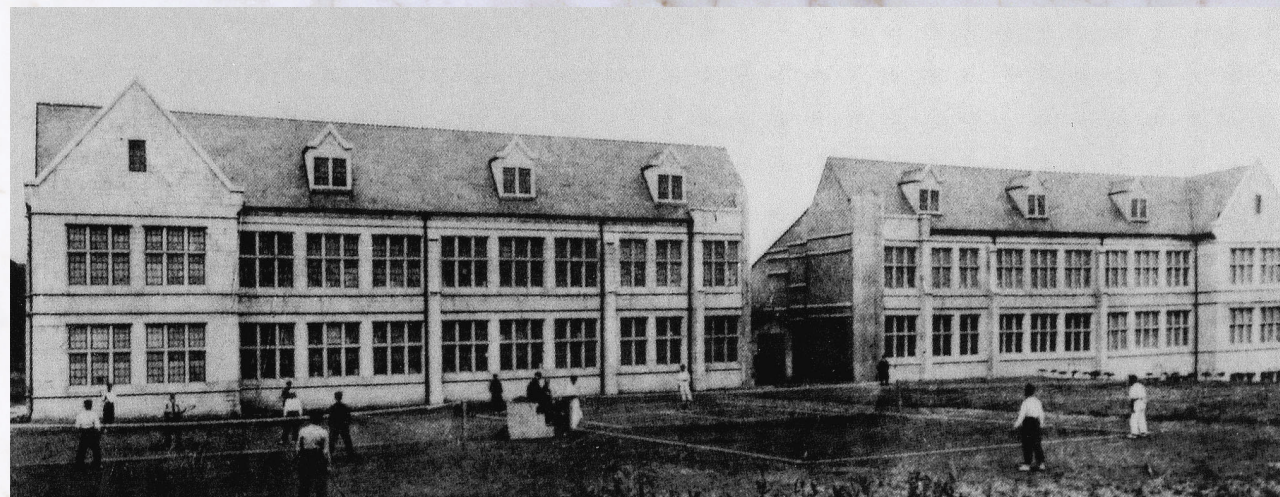
古紙配合率100%再生紙を使用しています
2003.12.8.1500

関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.3
2003

目次

学院史資料室写真集 2	1
『学院史資料室ニュース・レター』復刊について	2
追悼・石田昭義先生	3
追悼・山根雅信先生	5
資料・情報提供のお願い	6
創立119周年記念祈禱会説教「建学の精神の継承」	7
主な受贈資料一覧	9
学院史資料の紹介	10
編集後記	10

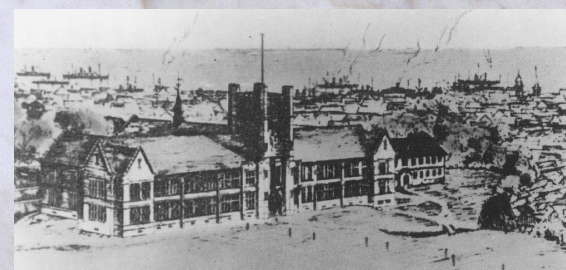


①

学院史資料室写真集 2 中学関東学院校舎1920年(大正9年)頃

①は中学関東学院の本校舎である。1920年（大正9年）3月31日に一棟、さらに1921年（大正10年）春に一棟が完成した。1921年3月31日、内村鑑三氏はこの本校舎を訪れ、そのときの様子が氏の日記に残されている。「三月三十一日（金）半晴、無風の好き日であった。正午少しばかりにて横浜に行き、諸友人の迎ふる所となり、山根が船長たる東洋汽船の巴洋丸に往った。（中略）陸に帰り、野毛山のつづきに新築されし関東学院の校舎を見た。米国バプテスト教会の経営になる者、其規模大にしてその設備の完全なるに驚いた。其校長は文学士坂田祐君、旧き柏木連の一人である。其教頭ならびに二三の教師もまた同信の友である。斯くて我が信仰の友にして汽船に長たる者あり、学校に長たる者あり、海と陸とは漸々に我有に帰しつつあるように感ずる。」（引用）

アメリカ・バプテスト・ミッションの多大な援助により立てられた本校舎二棟は鉄筋コンクリート二階建てであった。震災にも崩壊しないとのことであったが、完成二年後の1923年（大正12年）9月1日正午近くに起きた関東大震災によって校舎は崩壊してしまった。校舎間の中央に塔ができる予定であったが、それも完成予想図（①-a）で窺い知れるのみである。



①-a



②

②は関東学院史上、最初の建物である。寄宿舎として建てられたが、中学関東学院創立当時（1919年（大正8年））は仮校舎として使用された。本校舎完成後の1920年（大正9年）4月からは寄宿舎として使用された。



石田昭義先生を偲ぶ

学院長 松本 昌子

元関東学院院長、元六浦中学校・高等学校校長、故石田昭義先生の御逝去にさいし、心からなる哀悼の意を表するとともに、御遺族の皆様の上に主の豊かなお慰めを祈ります。

「寒昂おのが天職諾ひぬ」

これは中村草田男氏に師事された石田先生が出された句集『天職』の中の代表句であります。この句には先生の全生涯の歩みと、その歩みを照らした静かな、しかし強い光が輝いています。教職は先生为天職、その職場は関東学院六浦中学校・高等学校と関東学院でした。そして、先生をこの天職へと導いたのは元関東学院中学校長、院長の坂田祐先生との出会いでありました。

日中戦争以来、日本は軍国主義体制となり、中学校以上の学校は軍人養成を教育目標にかかげました。中学では柔道と剣道が正課となり、軍事教練が強制された時代であります。幼少時にかかられたポリオの後遺症で、右手全体と左手の上膊が麻痺する障害を負われた先生には、当時中学進学の間は完全に閉ざされていました。戦時下、県の行政当局から礼拝中止をきびしく勧告されても、決して学内での礼拝を止めなかった坂田先生が、1942年(昭和17年)、このような状況下で、大英断をもって石田少年を関東学院中学部に迎えて下さったのです。

これが石田先生と関東学院の出会い、キリスト教信仰との出会いでありました。中学卒業後先生は國學院大學に進学され、卒業と同時に1952年(昭和27年)、六浦中学校・高等学校に国語科教諭として奉職されました。

1987年(昭和62年)10月、永年勤続三十五年の表彰を受けられた時、中学在学五年、教師職三十五年、

関東学院と強く結ばれた足跡をふり返り、先生は「来し方は教師一筋雁の列」という句を読まれています。先生の詠まれた句には、みな神の恩寵に感謝し、御家族を愛し、生徒に心を配り、教師という天職に満足して、一途な信仰に生きた静かな幸福感と気品が漂っています。先生は幸福な御生涯を送られたと思います。その幸福は生来のおだやかな気質に由来するものと拝察いたしますが、幼少時に重い障害を負い、軍国主義の時代に多感な少年期をすごされた先生の中で、のきびしい葛藤をへて獲得されたのに相違ありません。

先生には『いまの時を生かす——若い人たちへのメッセージ』と『順境の日は楽しめ、逆境の日は考えよ』という若い人たちに向けた二冊の著書があります。『いまの時を生かす』のなかで、次のような堀田善衛の言葉を引用されています。「仕合せ感の根底には、いつもある種の諦念（ある境地を悟ること）というものが滞在している筈である。それなくしては、仕合せの感というものは、長く支えられない筈であるから」と。迷いや試練や葛藤をへてある境地に達すること。これが石田先生にとってはキリスト教の信仰に到達することであったのでしょうか。

どんな職業につき、どんな境界を生きることになったとしても、きびしい人生を生き抜く力を授けることが、結局は教育の目標であると私は信じています。関東学院での教育を通して、園児、児童、生徒、学生が、自分と同じように、その一生を支えるキリストにある仕合せ感を得ることを、石田先生は「天職」とされていたと思います。その使命を果たし、今は天国で安らいでおられる先生に、改めて関東学院での長年の御貢献に感謝を捧げるとともに、この混迷の時代にあって、私達は、若者が希望をもてる、仕合せ感を獲得できる教育のために努力したいと存じます。

『天職』という句集をお贈り下さいました時、石田先生は私に批評を聞かせて下さいとおっしゃいました。批評など素人の私にはもってのほかの事でしたので、何もお返事はいたしませんでしたが、ここで、私の心に強く響いた三句をあげて石田先生への哀悼の辞といたします。

「紫陽花や褒貶間はじと思ふ日々」

「一途てふ意志持つごとく冬木佇つ」

「馬の眼にある含羞や青葉中」

『学院史資料室ニュース・レター』復刊について

学院長 松本 昌子

1980年代のはじめ頃から、故 藤本一郎 学長のもとで、大学や学院の歴史資料収集のための幾つかの試みが断続的におこなわれた。その成果のひとつが、1992年（平成4年）に実現した法人総務部のもとでの「関東学院史資料室」の設置である。その目的は、関東学院の歴史を後世に正しく伝えるための貴重な資料の収集であるが、同時に、現在の学生や教職員や保護者に、キリスト教に基づく学院の教育理念や歴史を知ってもらうことにあった。それが学院のアイデンティティの確立のために、緊急かつ有効な要請だったのである。

そのために当時の法人事務局長代理、法学部教授、折橋徹彦氏が編集の労をとられ、『関東学院学報』が発行され、その第4号から学院宗教主任、経済学部教授、高野進氏が「学院の源流を探る」というタイトルで、創立者アルバート・A・ベンネット博士ほか、学院の歴史を担ってきた宣教師や日本人教師の業績を紹介されている。現在『関東学院学報』の編集は、広報課にゆだねられ、26号まで発行されている。

1984年（昭和59年）に学院は創立百周年を迎え、

『関東学院百年史』と『写真による関東学院百年史1884－1984』を発行している。125年史発行の準備を兼ね、貴重な史料の散逸を防ぎ、新たな史料の収集のために、「学院史資料室」は『学院史資料室ニュース・レター』の発行も始めたが、さまざまな事情のために、2号で休刊になってしまった。

創立百周年の1984年以降の世界状況の変化、とくに教育改革などの変化は激動的であり、その変化の激流のなかで、関東学院も存在しているので、その変化を体系的に緻密に記録することが、資料室の重大な役目だと思われる。何と言っても100周年と125周年の間には、20世紀と21世紀の境目があるのである。この激動の時代をくぐりぬけて、新しい展望のもとで、創立以来変えてはならぬ建学の精神を具現するためには、新しい試みが要求されるし、学院はそれに応えねばならない使命をもっている。後世に残すのに恥ずかしくない記録が残ることを祈って、ここに『学院史資料室ニュース・レター』の復刊をきめた次第である。皆様の御協力を衷心よりお願いする次第である。



故石田昭義元学院長、 元六浦中高校長を偲んで

元六浦中学校・高等学校教頭 伊藤 清

先生は1928年（昭和3年）藤沢に生まれた。幼少時に、脊髄性小児麻痺を患い後遺症で両手に麻痺が残った。このため、1940年（昭和15年）当時は軍国主義体制下にあつて身体に障害があるものは一般の上級学校進学が閉ざされていた。先生は進学期を迎えてその苦悩の中にあつた時、坂田祐院長がキリスト教の教えに基づき差別することなく関東学院中学（旧制）に入学を許可した。この中学時代に坂田祐院長や担任の村田汎愛先生の薫陶によってキリスト教に目覚めて藤沢教会に通いはじめ、中学卒業の1947年（昭和22年）藤沢教会の斉藤庫三牧師からバプテスマを受けた。同年文学への途を志して國學院大學予科に入学。1952年（昭和27年）國學院大學文学部を卒業し、母校の村田先生に招かれて関東学院中高六浦教室（翌年関東学院六浦中高として独立する）の教員となり、同校の創立から1994年（平成6年）に定年を迎えるまで42年間にわたり母校で教鞭を執った。またこの間に図書館長、教務主任、教頭を勤め、1980年（昭和55年）には校長に就任し14年間その職務に当たった。同時に中高校長兼務で関東学院理事、関東学院学院長事務取扱となり、1993年（平成5年）には関東学院学院長に就任し、全

学院において建学の精神の高揚に努めた。六浦中高の教頭から校長の頃には激しい大学紛争の影響による学内の混乱や厳しさを増してきた大学受験競争などで知育偏重に流れ学校教育の在り方が問われて来た難しい時期にあつて石田先生は終始、キリスト教の教えによる人間教育を目指し、また実情に即した授業内容の充実と教育施設の拡充を学校運営の目標に掲げ、建学の精神の高揚と本校教育の質的向上に努めた。またキリスト教会の活動に使命感をもってその運営に尽力した。1970年（昭和45年）から藤沢教会付属みに幼稚園園長、藤沢YMCA設立準備委員、藤沢YMCA運営委員長、同財務委員、教育顧問、横浜YMCA常議員、同常議員会議長、などを歴任し、終生キリスト教会の活動に力を注いだ。また金沢地区ロータリークラブ会長を務める等の業績に対して神奈川県知事、および文部大臣から教育功労者として表彰され、正六位勲四等瑞宝章の叙勲を受けた。また学生時代から俳句の会「萬緑」の同人となり、後に改めて「未来図」の同人として句作に励み、大部な句集『天職』を上梓した。その中に“寒昂おのが天職諾ひぬ”“教職を堅固に生きぬ鰯雲”と詠んでいるように教職を己が天職とし、また『いまの時を生かす―若い人達へのメッセージ』や『順境の日は楽しめ、逆境の日は考えよ』などの啓蒙的著書を通して青少年の教化に努めた。このように先生は関東学院で育ち、キリスト教の信仰に支えられ生涯を通し教育者としての使命感をもって活動し学院や社会の為に、大きな働きをした。

石田昭義先生 略歴

1928年(昭和3年) 9月1日	神奈川県藤沢市に生まれる
1952年(昭和27年) 3月	國學院大學文学部国文科卒業
1952年(昭和27年) 4月	関東学院六浦中学校・高等学校に奉職
1966年(昭和41年) 4月	
～1980年(昭和55年) 3月	関東学院六浦中学校・高等学校教頭
1980年(昭和55年) 4月	
～1994年(平成6年) 3月	関東学院六浦中学校・高等学校校長
1980年(昭和55年) 6月	
～1997年(平成9年) 5月	関東学院理事
1993年(平成5年) 1月	
～1993年(平成5年) 5月	関東学院学院長事務取扱
1993年(平成5年) 6月	
～1997年(平成9年) 5月	関東学院学院長
2003年(平成15年) 4月15日	召天



1988年11月 山 柝 雅 信

写真は『山柝雅信教授退職記念論文集』（1988年(昭和63年)3月発行)より転載。氏名と日付は山柝先生の直筆によるもの。

教師としての山柝雅信先生

人間環境学部教授 所澤 保孝

山柝雅信先生は関東学院の源流についてその著書『クラークと内村鑑三の教育』の中で次のように語っておられる。

「1979年（昭和54年）は関東学院が横浜三春台の今の地に創立されて60周年に当たる。同じ横浜の元町に近い山手の桜にかこまれた丘の下に、日本バプテスト伝道発祥（1873年）の小さい記念碑があるが、これが関東学院のキリスト教教育の源流を示すものである。

さて私はもう一つの源流を紹介したい。それはW. S. クラーク、内村鑑三、坂田祐の流れに沿うもので、両者ともに聖書を基とし、聖書から出発しているが、前者が牧師的であるのに対し、後者は軍人的であり、前者が神学的であるのに対し後者は自然科学的である。」

また、長い間山柝先生とともに工学部で教育にあたって来られた元工学部長の川上親孝先生は、工学会が1982年（昭和57年）に発行した「工学教育の源流を求めて」という小冊子の序文で山柝先生を次のように紹介しておられる。「クラーク博士が身を挺して行った実物に即した教育と研究の方法は内村鑑三を畏敬する山柝教授の教育方針に引き継がれその情熱を教育と研究に向けて実施されて我々に多くの示唆を与えてこられた。」

冒頭に引用したこの二つの文章は私が今回果た

すべき教師としての山柝先生について語るという身に余る大役の根幹を言い表わしてくれている。山柝先生には私の先輩や後輩達にあたる方の中に多くの優秀な教え子が星の如くおられ、不肖の弟子である私が先生について語るのは適任でないことは言うまでもない。

私が流体力学研究室に所属して卒論を書いていた頃は、研究室には先生の教え子である横溝利男先生が専任講師としてすでにおられ、直接学生の指導に当たっておられた。今のEF館のあたりにあったメッキ工場の一隅にあった研究室に昼も夜もたむろしていたが、山柝先生はわれわれ学部学生にとっては雲の上の方のような存在で、親しくお話をするなど畏れ多いことのように感じられた。

私は先生の流体力学の授業を履修したが、授業は研究室の隣の階段式教室兼実験室で行われた。古い戦前の工場の一隅にあり、冬でも暖房はなく、床はたたきで緩やかな傾斜の階段教室での授業は懐かしい思い出がある。今から思えばその教室は山柝先生の教育に対する理念と情熱が一杯詰まった手作りの理想的教室であつたに違いない。そこには流体力学に関する各種の実験装置が置かれ、当時珍しかったビデオカメラとテレビモニターにより実験を観察するという革新的な授業が行われていた。サイホンの実験の際に透明のビニール管の一方を吸って水を飲み込んでしまいむせてしまった先生。カルマンの渦列が綺麗に現れて一人悦に入っていた先生。先生は学生達が五感を使って現象を捉え、その本質や原理を理解することに情熱をそそいでおられた。その教え方は時として迂遠のようにも思われたが、抽象的ではなく具体的に把握することを優先されたものであった。例えば、われわれには捉えにくい空気の流れやポンプの中の水の流れを可視化、または可聴化させて理解させるといったことに力を注いでおられた。そのために先生は従来の大学の黒板と話による二次元的講義とは違った、実験装置や視聴覚機器を援用した立体的授業を試みておられた。

また先生はそのころアメリカ留学から戻ってこられたばかりの栗原敦雄先生達と共に、主に一般教育の科目を視聴覚機器を使って多数に対して授業をする多数教育の研究も行っており、日本ではまだ珍しかったOHPを使った授業なども工夫されていた。私はそのような新しい教授法による授

業を受けていることに秘かに誇りを感じている学生
の一人であった。後に私が工学部を出てから教育
の分野を専攻し直したのは、山柘先生との出会
いや流体力学研究室で過ごした日々も影響してい
る。

山柘先生は第二次世界大戦中に飛行機の技術者
としてキャリアをスタートされた流体力学の専門
家であるが、先生の中で工学と教育は常に表裏一
体をなすものであったと思われる。その証拠に先
生は日本機械学会工業教育部会の会長を務められ、
長い間、国際基督教大学で理科教育法や教材論を
教えておられた。

先生はご両親が内村鑑三のお弟子であったこと、
坂田祐先生がやはり内村鑑三のお弟子であったこ
とから関東学院との人的・精神的つながりは深い
が、キリスト教による人格形成に力を注ぎ、自然
科学を教え、実物教育に力を注いだという点から
も関東学院の源流であるウイリアム・クラークの
流れを汲んでいる方だと言えよう。

先生は良く物事を観察し、小さな発見に感動し、

その発見を嬉々として人に語っておられたし、横
浜育ちという面もあってか、進取の精神に富み、
既成概念をうち破り、時として奇抜とも思える考
えに挑戦しておられた。先生は学生にあまり直接
指示を出したり注意をしたりするようなことはな
さなかった。しかし今から思えば、常にあるべ
き手本を黙って示されていたように思う。私が研
究室の学生であった頃はまだ学生と一緒に内村鑑
三研究をされるということではなかったが、他の先
生方とキリスト教と科学について良くお話をされ
ていたのを思い出す。

いま目をつむると、大きな体を小さな車に乗せ、
流体力学実験室の前を颯爽とまでは行かないが愛
用のブルーバードを嬉しそうに運転されている姿、
見る人に癒しと和らぎを与える先生の風貌と語り
口、そして研究室で椅子に座って黙って祈ってお
られるお姿が目に見えてくる。いま自分がその
ころの先生の年になり、関東学院大学で学生を教
える立場になって、一層、山柘先生と言う恩師の
偉大さを感じている今日この頃である。

山柘雅信先生 略歴

1916年(大正5年) 8月14日	東京に生まれる
1942年(昭和17年) 9月	名古屋大学理工学部航空学科卒業
1949年(昭和24年) 4月	関東学院大学工学部助教授
1957年(昭和32年) 4月	関東学院大学工学部教授 ・工学部長、工学総合研究所長等を歴任
1961年(昭和36年) 12月	工学博士
1988年(昭和63年) 4月	関東学院大学名誉教授
2003年(平成15年) 3月31日	召天

資料・情報提供のお願い

学院史資料室は学院に関する資料の収集をしています。

各学校、各部署等で発行されました刊行物は一部、学院史資料室にご寄贈くださいますよう
お願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっ
ている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけます
ようご協力をお願いいたします。

学院史資料室（瀬沼・高橋・岡崎）

創立119周年記念祈禱会説教

2003年（平成15年）10月11日

「建学の精神の継承」

コリントの信徒への手紙 ― 3章10節～11節

六浦中学校・高等学校 宗教主任 大井 人

本日ここに創立119年の祈禱会・記念式
をとり行うことが出来ますことは感謝であ
ります。

又学院が天の父なる神様の恵みのもとに
一大、学院として発展をとげているこの事
実に深く感謝するものであります。それも、
学院の運営に当たられている理事長をはじ
め理事の方々、教学の責任を持たれている
院長をはじめとして、各々の部署において
一生懸命に働いておられる教職員の方々の
働きがあったからこそと思います。そして、
そのすべてに神の御思寵が働いていたこと
を思う時、この学院存立の大きな意味を考
えざるを得ないのであります。

この様な記念の時に私達はもう一度、本
学院が創立した意味を問うことは大切なこ
とではないでしょうか。

言うまでもなく、寄附行為の第一条には
「本法人は教育基本法及び学校教育法に従
い、キリスト教に基づき、学校教育を行う
ことを目的とする」と、非常に明確な理念
のもと教育が行われることが明記されてい
るのであります。そして、この建学の精神
をより具現化するものが「校訓」でありま
しょう。

「人になれ 奉仕せよ」との校訓も、この
様な大きな学園となり、世界情勢の著しい
変化や社会のしくみの変化、人々の持つ価
値観の変化の中にいやおうなしに揺れ動か
されておりますが、その中で、もう一度建
学の精神及び教訓について考えることが大
切だと思います。先に申し述べた校訓の言
葉は中学関東学院の第一回入学式に於ける

坂田祐先生の祈って上より示された言葉で
あると言われております。校訓としてこれ
程すばらしい言葉はそうは無いのではない
でしょうか。しかし、この校訓の「人にな
れ」程、同時に多種多様な解釈がなされ易
い言葉もないと思います。

上から祈って与えられた言葉、この坂田
先生が度々語られる言葉の中に、熱心なキ
リスト信仰に裏うちされた、先生の精神的
体験や内村鑑三先生をはじめとする多くの
先生方から学ばれた聖書の真理が凝縮され
ていると言ってもよいでありましょう。

先生は入学式・卒業式の告辞等で常に人
間の不完全さを示されております。

例えば大学礼拝の説教の中で「……われ
われ教員は、欠点の多い不完全なものであ
りますから、自分らの力で教え子たちを立
派な人に作り上げる、即ち『人づくり』な
どはできるものではありませんから、完全
無欠なるイエス・キリストを模範とし、そ
の教えによって人になることであります。
キリストの言葉は『あなたの天の父が完全
であられるように、あなたがたも完全な者
となりなさい』とあります。これは神様の
ようになれというのではなく、人として完
全なものになれということであります」。
そして、本日示されたコリントの信徒への
手紙 ― 3章10節～11節「神から賜った恵
みによってわたしは、熟練した建築士のよ
うに土台をすえた。そして他の人がその上
に家を建てるのである。しかしどういふ
うに建てるか、それぞれ気をつけるがよい。
なぜなら、すでにすえられている土台以外

（次ページに続く）

主な受贈資料一覧（2003年4月～2003年9月）

受入年月	寄 贈 者	資 料 名	出版年月
2003.4	鹿角市立大湯小学校	鹿角市立大湯小学校百周年記念誌	1974.12
2003.4	鹿角市立大湯小学校	鹿角市立大湯小学校百二十周年記念誌	1995.3
2003.4	学習院大学 国際シンポジウム事務局	学習院大学国際シンポジウム「記録を守り記憶を伝えるー21世紀アジアのアーカイブズとアーキビスト」報告および討論の記録	2002
2003.4	駒澤大学	駒澤大学百二十年史	2003.3
2003.4	財団法人 大学基準協会	じゅあ 第30号	2003.3
2003.4	財団法人 野間教育研究所	野間教育研究所紀要 第45集	2003.3
2003.4	神奈川大学 大学資料編纂室	神奈川大学史資料集 第十九集	2003.3
2003.4	武蔵野美術大学	武蔵野美術大学年報 1999ー2001年度版	2003.3
2003.4	社団法人 私学経営研究会	私学経営 No.338	2003.4
2003.5	東北学院資料室運営委員会	東北学院資料室 Vol.2	2002.12
2003.5	広島大学 50年史編集室	広島大学史紀要 第5号	2003.3
2003.5	全国大学史資料協議会東日本部会	大学 アーカイヴズ No.27・28合併号	2003.3
2003.5	東京大学史料の保存に関する委員会	東京大学史紀要 第21号	2003.3
2003.5	桃山学院年史委員会	桃山学院年史紀要 第22号	2003.3
2003.5	北海道大学125年史編集室	北海道大学125年史編集室だより 第6号	2003.3
2003.5	立教学院史資料センター	立教学院史研究 創刊号	2003.3
2003.5	京都大学 大学文書館	京都大学 大学文書館だより 第4号	2003.4
2003.5	財団法人 野間教育研究所	野間研だより No.12	2003.4
2003.6	宮城学院資料室運営委員会／宮城学院資料室	宮城学院資料室年報 一信・望・愛ー 第9号 2002年度	2003.3
2003.6	九州大学	国立大学におけるアーカイブの設置とその機能	2002.11
2003.6	九州大学	九大風雪記	2003.3
2003.6	九州大学 大学史料室	九州大学 大学史料室ニュース 第20号	2003.2
2003.6	九州大学 大学史料室	九州大学 大学史料室ニュース 第21号	2003.3
2003.6	九州大学 大学史料室	九州大学 大学史料叢書 第11輯	2003.3
2003.6	東京大学史史料室	東京大学史史料室ニュース 第30号	2003.3
2003.6	東北大学百年史編集委員会	東北大学百年史 四 部局史 一	2003.5
2003.6	日本大学百年史編纂委員会	日本大学史紀要 第9号	2003.3
2003.6	武蔵学園	武蔵学園史年報 第八号	2002.12
2003.6	名古屋大学	草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治	2003.3
2003.6	名古屋大学	名大祭 一四〇年のあゆみー	2003.3
2003.6	名古屋大学 大学史資料室	「開かれた大学」とこれからの文書資料管理・情報公開	2002.12
2003.6	名古屋大学 大学史資料室	名古屋大学 大学史資料室ニュース 第14号	2003.3
2003.6	名古屋大学 大学史資料室	名古屋大学史紀要 第11号	2003.3
2003.6	名古屋大学 大学史資料室	名古屋大学 大学史資料室 保存資料目録 第3集	2003.3
2003.7	財団法人 大倉精神文化研究所	横浜の教育と文化（一）	2003.3
2003.7	福岡大学 大学史資料室	福岡大学大学史資料集 第1集	2003.3
2003.7	拓殖大学 創立百年史編纂室	拓殖大学百年史研究 12号	2003.6
2003.9	駒澤大学 禅文化歴史博物館	禅の世界	2003.3
2003.9	駒澤大学 禅文化歴史博物館 大学史資料室	駒大史ブックレット 1	2003.9
2003.9	情報保存研究会	情報の保存と活用のための JHK ダイレクトリ 2003年版	2003.9
2003.9	神奈川県立歴史博物館	神奈川県立歴史博物館だより	2003.7
2003.9	成蹊学園一〇〇年史編集委員会	成蹊学園100年史 年報 第1号	2003.3

のものをすすえることは、だれにもできない。そしてこの土台はイエス・キリストである」を読まれ、この土台、キリストという土台の上に立ってはじめて、自分を人間に形成、すなわち、人になることが出来ると語っておられます。何故なら、先生によりますと被造物としての人間の有限性や罪性によって人を導くなど、とうてい出来るものではないとの告白がなされています。

故に、先生の考えの中には「人は自分の努力で自分をいかようにでも高めたり、低めたりすることができる」という、いわば人間至上主義とか人格主義とは根本的に異なったものとみておられました。

先生の方向性はトマス・ア・ケンピスの『キリストにならいて』のように、いかに、キリスト・イエスの歩まれた道を自分も歩むかでありました。

ここのことについて友井篤先生（これを語かれた当時は院長事務取扱い）は、『「人になれ」とは、どんな人になるかを、いくつかの箇条にまとめて片付けられるようなものではなく、教える者も、教えられるものも、ともどもに、めいめいが、聖書の中からそれを見つけ出さねばならないものなのです。これで「人になれ」の出発点と目的地、それにその道中はおわかり頂けたと思いますし、又「人になれ」と「人を作る」との根本的な違いもおわかり頂けたと思います』と言っておられます。

キリスト・イエスのそのような歩みによって隣人に対して、どのような奉仕の業が出来るのかについて坂田先生はヨハネによる福音書15章12節～13節を引用されて『奉仕についてのみ言葉はこうであります。「わたしのいましめはこれである。わたしがあなたがたを愛したようにあなたがたも互いに愛しなさい。人がその友のために自分の命を捨てること、これより大きな愛はない。」』と言っておられます。

まさに先生の目ざしておられた校訓はキリスト・イエスが神の御子として、すべての人々の唯中に来て下さり、最も低い、みにくい、罪深い人間と共に歩まれ、人々の罪をゆるし、救いに導かれた神の一方的な和解の出来事によるのでありました。この出来事によって神の愛が私達に示されました。すなわち、その徹底的な「愛（アガペー）」にあるのです。どんなにりっぱな論理、学説が説かれ、美辞麗句がならべたてられたとしてもそれだけでは足りないと思います。

己れを低くして、他者と共に立つことの出来る人、共感出来る人、そんな愛に満ちた生き方を若い人々に指し示すことこそ学院が目ざす教育と言えないでしょうか。

そして、その愛こそは「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」のヨハネによる福音書15章13節に集約されるものでありましよう。

私達はこのような創立を記念する日に再び原点に立ち帰って「人になれ 奉仕せよ」との校訓が唯単なるお題目、キャッチフレーズとして語られたり、用いられたりするのではなく、その中味を考える時とすることが出来たらすばらしいことと思っています。

今の時代はそのことが真に望まれている時代だとも言うことが出来ると思います。その上に立って、真に、学問性においても精神性においても関東学院はどこか違うと世間の人々に評価される学園として成長していくことをすべての教職員が心して、共に祈り続けて参りたいと思います。

しっかりとした理念を持った学園こそが、この厳しい競争社会の中で生き残っていくであろうし、先達の方々が真に望んでおられたことではないかと思います。

119年の創立を心より喜ぶたいと思います。